# テクストの結束性に与る語彙とその機能について

高崎みどり（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科）

# Characteristic Cohesive Feature of Vocabulary and its Function in the Text

Midori Takasaki (Ochanomizu University, Graduate School of Humanities and Sciences)

## １．はじめに

本発表の目的は、語彙とテクストとの関係について、結束性と“談話構成語”の観点から、考察することである。

使用コーパスは、国立国語研究所「文章における語彙の分布と文章構造」プロジェクト（プロジェクトリーダー：山崎誠）作成の“学術入門書コーパス”から、『政治学入門』（阿部齊　岩波テキストブックス）、『日本外交史講義』（井上寿一　岩波テキストブックス）、『アメリカの経済　第２版』（春田素夫・鈴木直次　岩波テキストブックス）、『刑法原論』（内藤謙　岩波テキストブックス）、の４種、計 976 ページ、約 19 万４千字を使用した。

## ２．先行研究について

本発表で依拠する「結束性」と語彙との関わり、および「談話構成語」に関わる先行研究について簡単に触れる。

ハリディ／ハッサン（1997）では、「結束性は、テクスト内のある要素と、その要素の解釈に欠くことのできない他の要素との間の意味的な関係である。」（p.9）とし、「語彙的結束性」の言語体系における表示は「再叙[1]（語彙的指示の同一性）」や「コロケーション（語彙環境の類似）」によってなされる、とする。一方「文法的結束性」は、「指示、代用、省略、接続」によってなされる、とする。

次に「談話構成語」について、マッカーシー（1995）は語のタイプを文法語（grammar words）と語彙語（lexical words）とに区別した上で、テクスト分析の方法として、その中間にあるような機能を持つ語に注目する。「談話構成語　discourse- organizing words」と呼ばれる語で、“issue” ”problem” “dilemma”のような語がその例とされ、「これらの語は、テクストの分節の代わりをしているのである（ちょうど代名詞のように）。分節は、１つの文である場合もあるし、数個の文、パラグラフ全体、あるいは、それよりも広い範囲である場合もある。」（p.106）と、説明されている。すなわち、テクストの中で使用されるとき、“issue（争点）”がテクストの内容のうちのどこの部分をさすのか、“dilemma（ジレンマ）”とは何と何とをさすのか、といったその語が及ぶ範囲が一種の“分節”となることの他、より大きなテクストパターン

[1] 「再叙（reiteration）」の内容は、同一語の繰り返し、同義語や近似同義語、上位語、一般名詞（people, stuff, move などのような一般的指示をもつ名詞類）、人称指示語、だという。「コロケーション（collocation）」は、「同じ語彙的環境を共有すること」を意味し、類似した文脈に現れる傾向のある２つの語彙項目あるいは「長い結束性の連鎖」が構築されることとなると述べる。

（問題—解決など）を示し、談話の全体像を予測させる働きを持つ、とする

### ３.「問題」という語についての「学術入門書コーパス」検索結果

さて、大量のコーパスを使用して、結束性について考察するときの方法として最も簡便な方法は、「再叙」のなかの同語反復に注目して、ある語を検索にかけてその出現の様相を追うという方法が考えられる。今回、談話構成語についても見たかったので、上記のマッカーシー（1995）などでもその例に挙げられている「問題」という語を選んでみた。

語彙的結束性という考え方と、談話構成語およびそれによる「分節」という概念を適用して、以下では「問題」で試行した結果を報告する。

「問題」という語そのものは、4 つの資料で計 729 回出現した。「××問題」「問題意識」「問題点」、「途上国債務問題」など、熟語や臨時一語[2]のような形で使用されている場合も含む。その中で『アメリカの経済』の第１章のコラム「“９・１１”テロの衝撃」での以下のような使われ方に注目した。少し長くなるが原文をしめす（見出し、段落における改行一字右寄せなどはそのままとした）。

**例１**　“９．１１”テロの衝撃

２００１年９月１１日朝，ニューヨークの世界貿易センター（ＷＴＣ），ワシントン郊外の国防総省，そしてペンシルバニア州西部での，ハイジャックされた４機の旅客機によるテロは，世界に大きな衝撃を与え，アメリカのみならず，多くの国々の政治・社会，国際政治を大きく変えることになった．経済的影響にかぎっても，直接の物的損害に加え，運輸・通信の阻害，波及する旅行・流通・生産への障害から，各種のテロ対策，さらにその後の軍事行動など，波紋は長期にわたる．ここでは，直後の経済**問題**①を紹介する．

最も直接的な打撃を受けたのは航空運輸であるが，当初の運行停止，再開後も警備強化による渋滞や旅行手控えによる旅客の減少，貨物の渋滞などにより，関連する経済活動への障害へと波及した．航空会社だけでなく航空機製造にも影響が及び，旅行業界が大打撃を受け，小売売上げも一時大きく落込んだ．保険会社は巨額の支払い**問題**②に直面し，製造業では部品調達の困難からＪＩＴ経営が弱点を露呈した．カナダ国境で陸上輸送の滞りも現れた．景気の下降はこの事件で決定的になったといってよい．しかし，マクロ経済への影響は短期的で，数週のうちに力強い回復が始まった．

もうひとつの大**問題**③は，ニューヨークの金融の中枢近くが破壊されたことによる直後の困難である．マンハッタン島南部のベライゾン（Verison）社の電話施設が使用不能になり，破壊されたＷＴＣビル内の証券会社数社と，金融市場取引決済銀行のひとつが業務不能になった．政府証券市場は翌々日まで，株式市場も翌週月曜まで開かなかった．近隣の諸機関の営業継続にとっては，Ｙ２Ｋ（２０００年**問題**④）対策でのバックアップ施設が救いの神になり，同時に危機管理の**問題**⑤点も明らかになった．

↑通信途絶による支払い連鎖切断への対策が急がれた．中央銀行当局は十分な流動性供給を行う準備があることを声明，攻撃翌日の貸出額は１日で４６０億ドルに及んだ．攻撃前の１週間の平均日額は２億ドルを下回る．その他，小切手取立て前入金扱い（フロート），海外ドル決済容易化のための外国中央銀行とのスワップ，市場再開後はオペでも，資金を供給

[2] 石井正彦（1999）「臨時一語と文章の凝縮」（『国語学』173　pp.91-104）等において、多く凝縮的文章においてみられる、その場限りで国語辞書にも登録されていない臨時的な語の組み合わせ、複合語をさす。

し，また，民間金融機関にも市中への柔軟な資金供給を要請して，金融メルトダウンを回避した．リスク管理上の**問題**⑥点は，バックアップサイトが被災施設に近すぎ，決済処理が過度に少数の機関に集中し，代替テレコム施設が無効（予備の複数業者がいずれもベライゾンの回線に依存），などであった．↑<『アメリカの経済』pp.36-37>

上記文章中には「問題」という語が 6 回使用されている（①～⑥）。これは同語反復で、この間には再叙としての結束性が生じている、とだけ考えれば、このテクスト引用部分を観察したことになるだろうか。これら 6 語はみな“同じ”ものであろうか。

①「問題」は「経済問題」のかたちでこれからその内容を述べることを予告して、波線部の範囲を“経済問題”として分節化している。その分節化の手掛かりとして、内部には、「打撃」「渋滞」「減少」「障害」「大打撃」「落ち込んだ」「困難」「弱点」「滞り」「下降」のように、語彙論的な関係性ではないが“（経済から見て）望ましくない状態＝問題”を上位概念とする、マイナスの意味を含んだ語彙が、テクスト内で臨時的な結束関係を結んでいる。いちおう、全部に波線が施してはあるが、実は正確に言えば、この分節化はこれらの中から、「問題」の具体的な内容となるものだけを、意味的にすくい取っているのだといえよう。

③「大問題」で、「もうひとつ」という限定がなされていることで、①の「問題」とは別の大きな問題のありかが予告され、同様に波線部の内容が分節化される。この分節内にも「困難」「不能」のようなマイナスの意味を含んだ語を、「問題」の具体的な内容としてすくい取ることができる。ここで注目すべきは、⑤⑥の「危機（リスク）管理（上）の問題点」が③「大問題」の中に部分的なもう一つの「問題」の分節として入れ込まれている（↑から↑までの部分）という、複雑な分節同士の関係になっていることである。

一方、同じ「問題」の語が反復されていても、②「問題」（支払い**問題**）と④「問題」（２０００年**問題**）は、対応するテクスト内の分節がなく、この部分だけに意味が留まっている。もし、この本の他の節や章、あるいは注など別のところに対応する分節があり、“見よ項目”や注番号が付随していれば、分節と対応しているということになり、談話構成語として働いている可能性もあるのだが。

ここで思い起こされるのは、「テクストは、結局、形式の単位ではなく、意味の単位である」（ハリディ／ハッサン　1991　p.157）という捉え方である。テクストを構成するものは、意味の分節であり、また、それらのテクストの意味を実現するべく構成された分節の組み合わせや包含関係である。そして長大な学術的テクストを読み込むには、段落ごとに“筆者の言いたいこと”をまとめるのでなく、いくつかの合図になるような語から、大小の分節を作り出し、対応させて、それらをイメージ化してプロットを構成することが必要になってくる。そのように考えると「問題」①③⑤⑥は、現に意味の分節に対応しているという合図である談話構成語として機能しているといえよう。

次に、別の角度からもう少し「問題」の出現箇所を追う。

「問題」の出現例として同書第 2 章第 4 節「製造業の国際競争力の低下」の中に「大量システムの限界」という項があって、“自動車産業を中心とする大量生産型の製造業の技術革新が遅れ、労働意欲の低下、生産効率の低下を引き起こした”という主旨で、その内容に沿った事象を色々と挙げている。その次の項でこの第４節の最後の項にあたる「『覇者のおごり』」の最初は

**例２**　「覇者のおごり」

最後に，このような**問題**⑦の背後にあった企業経営の**問題**⑧を指摘しておこう．（『アメリカの経済』p.59）

と始まっている。そして続いてその“企業経営の問題”が述べられていく。「このような」という指示語で前項「大量システムの限界」の全体を大きく受けて、“問題”として分節化しており、項を超えた分節化がおこっているといえる。「このような」が無ければ、どこを受けているのかすぐにはわからないので、「問題」が談話構成語として働いているのかどうかも明確にはならない。こうした指示語の機能を、仮に「談話構成補助機能」と呼ぶ。これについては後述する。

そして、指示語の談話構成補助機能によって大きく前の内容の分節を受け止めた⑦「問題」を、続いてまた別の事柄（「企業経営」）に収束させ、さらに別の方向に文脈を展開させようとして予告的に⑧「問題」を使用している。

ここで注意したいのは、①～⑥そして⑦⑧は、ただの「問題」という語の反復現象と片付けてはならないということである。すなわち上記で指摘したように、“問題”として「問題」の周囲にある語句を手掛かりにテクスト内の意味を分節化し、「問題」から別の「問題」へ繋げたり、さらに「問題」の中に「問題」という語を分節の入れ子のように使用したり、分節間の関係を作りつつ、事柄間の関係づけを果たし、知識の整理から理論化へ、いくつかの条件から結論への誘導へ等、学問的な思考過程形成そのままに談話構成する仕掛けとして利用されている。

こうした”合図になるような語”は、おそらく経験的には知られているのであろう。あるいは語自体でなく、使用法である場合もあって、たとえば、上記テクスト内では、辞書的に言えば「問題」という語の語義のブランチのうち、多く第一義とされる「答えを求めるための問い。解答や教えを要求する問い。質問。」（『日本国語大辞典』）ではなく、第二義以降の「批判や論争、または研究の対象となる事柄。解決しなければならない事柄」「心にとめて考えるべき事柄。注目すべき点」（いずれも『日本国語大辞典』）の方で、談話構成語として文脈を形成しているといえる。第一義は古語辞典類にも用例があるもので、現代でも「試験の問題は難しかった」のように使用されるのであり、「問題」という語がただちに談話構成語として働くとは言えない。それはあくまでも特定のテクスト内での出来事なのである。

こう見てくると、語彙論上の語同士の関係から分節が形成されるというよりも、談話構成語によって分節される範囲内に、その談話構成語を相対的上位語として、下位語同士が結ぶ結束関係が生じているとはいえないであろうか。そしてそれらの下位項目同士は、普通、語彙論的にいえば、ある品詞の上位語・同位語・下位語、また類義語等は同じ品詞であり、単純語・複合語のレベルも同じでなくてはならない、といった制限があるようだ。しかし実際にテクスト内で語どうしが結ぶ関係というのは、たとえば上記の例１で①「問題」が、「打撃」「渋滞」「減少」「障害」「大打撃」「落ち込んだ」「困難」「弱点」「滞り」「下降」といった語の表わす内容と、上位下位として関係づけられていたように、もっと自由であり、その都度的で、意外性を持ち、創造的であるといえよう。

## ４．「点」「動き」（名詞）「アプローチ」についての「学術入門書コーパス」検索結果

「点」「動き」（名詞）「アプローチ」の 3 語についても同様の調査をしたが紙幅の都合で略述する。
「点」については、4 資料で 539 回使用され、「焦点」「論点」「観点」「転換点」「係争点」等の熟語として使用される場合が多く、「～という点からみて」「この点、～」等の慣用語句的用法、「～のは、・・・点である」「・・・点は～である」等の文型として幅広く使用され、これらの形で、分節化に関与し、談話構成語となることも多かった。
　典型的に談話構成に与る用法としては、

**例３**　資金循環の説明から外れるが、重要な政策問題として 2 点触れておこう。（『アメリカの経済』p.86）

として、「（１）」、「（２）」と箇条書きに、企業の健全性や住宅ローンについての課題が述べられている部分が、“重要な政策課題”と名付けられた分節となっている。
　国語辞典の意味ブランチとの関連で言えば、やはり第一義の「大きさがなく位置だけをもつ図形」（『日本国語大辞典』以下同）といった幾何学的定義でなく、「さし示す事柄。箇所。」という意義が利用されている。しかしながら、第一義からの“広がりの無さ” “小ささ”が、簡単さ、あるいは絞られた集約的な感じを連想させ、論点の簡約化、集約化という談話構成を、言述のストラテジーとしたいときに使用されたのがきっかけかもしれない。
　「点」については、マッカーシー（1995）の指摘に「すべての言語にそういう談話構成語があるのならば、教授／学習のプロセスにおいて、なんとか転移（transfer）を利用できないものか。他言語から、または他言語へ翻訳する場合、point（点）, argument（議論）, issue（争点）, fact（事実）のような語に直接対応する、信頼できる訳語があるのか。」（p.112）とあるように、第一義でない意味を談話構成語として使用するような場合は、翻訳語の影響もあるかもしれない。
　和語「動き」は 94 回と少ないが、『アメリカ経済』に 85 回と集中し、経済に関する金利や株価、失業率、ＧＤＰなど夥しい統計データにおける数字の増減を「動き」と名付けて、その現象そのものや、現象の原因や意味を分析している範囲を分節化する。これも辞書の第一義でなく「一つに決まらないで、別の状態に変化すること。移り変わりのようす。変動。また、ひとの地位や仕事が変わること。異動。」の第二義の方が、分節を捉えやすい。
　外来語「アプローチ」については、29 回しか使用されていない。専門分野の内容に関連して、というよりは、研究手法の説明等として使用されるが、他の 3 語のように、広い範囲の具体的な事象を分節化して談話構成の機能を果たすような場合は無く、この語は談話構成語としては未成熟であるのかもしれない。

　以上、具体的な語を少しばかりみてきたが、既に述べたように、ハリディ／ハッサン（1997）では、「結束性は、テクスト内のある要素と、その要素の解釈に欠くことのできない他の要素との間の意味的な関係である。」（p.9）と言っている。これらの調査を通して、談話構成語と、そのカバーする分節とはその関係性において、結束関係にあると言ってもよいかと思われる。
　長大なテクストを読み解くストラテジーとしては、個々の語彙のつくる結束性よりも、大きく談話構成する合図となるような語句と、それと意味的な関係を結ぶ分節との結束関係を追うことが必要かと思われる。

## ５．指示語の談話構成補助機能についての「学術入門書コーパス」検索結果

上記例 2 では「このように」という、前を大きく受ける指示語があるために「問題」の談話構成語としての機能がより明確になるということを述べた。指示は結束性の中で「文法的結束性」に属しているということからも、談話構成補助機能をもつことは納得できよう。

ここでは、さらに指示語の対象を広げて、不定指示ド系の指示語も合わせて見てみることとしたい。

『刑法入門』の第 3 章「犯罪現象の法的処理過程（１）」の中の 1 節を例にとる。

**例４**　しかし，実際には，１９９５年中の数字をみると，裁判が確定した者の総数は１０３万１７１６人であり，新たに行刑施設に収容されて懲役・禁錮・拘留の執行を受けた者は２万１８３２人である．だが，罰金の裁判が確定した者は，９６万７５１２人に達している．これに対して，無罪の裁判が確定した者は５２人で，簡易裁判所の略式手続による罰金・科料を含めた全事件裁判確定人員に対する無罪率は０．００５％にすぎない．有罪率は９９．９９５％に達する．通常第一審（地裁・簡裁）の公判手続による判決の場合をみても，無罪となった者は５６人で，判決人員総数６万１０２人に対する無罪率は０．０９％にとどまっている．後者の場合にも有罪率は９９．９１％に達する．

このように**罰金が多用されて，自由刑が現実に執行されることは比較的に多くないが，無罪となることは極度に少ないという解決にいたる**までに，犯罪現象の法的処理過程で，どのような**制度**がどのように**運用されている**のであろうか．本章と次章では，この**問題**を，公式統計と図２，図３（３９頁）を主な手がかりにして，制度運用の量的事実の側面を中心に検討することにしよう．（『刑法入門』p.26）

この例では「よう」を含むことで共通する「このように」「どのような」「どのように」の 3 つの指示語がかたまって出てきている。ちなみに「このような」は 4 資料合計 266 回、「このように」は 140 回、「どのような」は 81 回、「どのように」は 57 回使用されていた。

さて、「このように」は、前方のかなり広い状態部分を指し示す機能があるが、それだけで意味分節ができるほど繊細には働かない。その後の太字部分は「このように」と同格的であり、前方波線部の、多くの数字や専門用語が並ぶ記述内容を、1 つの過程として明確に端的に言い換えて意味を与え、分節化している。が、その分節化は前方状態指示「このように」がなければ、前を広く受けている保証が無く、談話構成としては、不安定なままとなる。

なお、太字部分の構造としては、談話構成語「解決（にいたる）」に連体修飾節が付されているものと考えて良いかと思う。

次の、「どのような**制度**がどのように**運用されている**のであろうか」に注目する。【ド系の指示語＋～疑問詞：か】というのは、読み手に対する働きかけ表現という面もあるが、「このような」と逆に後方に分節化が向かう機能に注目したい。この場合だと「制度」と「運用」について述べられている後方の部分までを分節化することになり、かつ後方でそれらが確実に述べられていることを保証し予告する。

加えてこの直後の「この問題」で「制度」と「運用」をひとまとめにして、「どのような～どのように～か」という疑問文を、【前方指示語「この」＋談話構成語「問題」】という名詞節に次元変換している。後方部分で述べられているということを予告し、かつ、「制度」・「運用」の分節としてその場所を特定化しているのが、下線部の後の「本章と次章」であり、

これはテクスト展開における現場指示的、メタテクスト的な表現である。そして同様に「公式統計と図２，図３（３９頁）を主な手がかりにして」は、後方の非文章テクストである図と、テクスト外の引用テクストである白書等の“公式統計”に関連付けられて、かなり大がかりに分節化することが予告されている。

すなわち不定のド系の指示語で投げかけられた語句は、その不定が特定の部分となって呼応し分節化が完了するまで、ずっとペンディングとなるという、かなり強力な談話構成機能を持っているといえるだろう。

## ６．終わりに

前後に意味の分節を作り、それと結束関係を結ぶ談話構成語について考察してきた。学術書の場合、専門用語がキーワードになりがちだが、「問題」のような、分節に意味付けを与えて、論をすすめる談話構成語をたどっていけば、学術的テクストを成立させているメカニズムが解明できるかもしれないと考えている。引き続き作業を続けたい。

テクストは生成過程であり、それを形成するのは意味の単位（＝分節）でしかない。その分節はしっかりとした固定的な存在でなく、現れたり消えたり、統合されたり、分岐したりする過程的な存在であるということもわかってきた。多岐にわたる複雑な大小の分節が入りこみ合って、それが思考過程を反映する形で、「結論」までもつれあっていくのである。“過程”に注目して観察していきたい。

一方、談話構成語は、読み手に対して、意味のある分節をここで作りなさいという合図になる。それどころか、談話構成語でまとめられていれば、いちいち前に戻って分節を作らなくても“前の方にはそんなことが書いてあったのか”と、まとめや要約の結果だけを受け取って先に進むことさえできるのだ。読み手にとっても、良き手掛かりとなるツールであろう。

今回、非常に長大なテクストを見たために、自分としては、今まで社説やコラム的な文章では気付かなかったことがいくつかわかったように思う。たとえば、語彙的結束性についても、ある分節の中には、語彙論的な語同士の関係による結束性よりも、その分節のもつ意味に関連する語彙が、臨時的につながって結束性の帯を作り上げているという場合をしばしば目にした。ひとつのテクストの中で、語彙の結束性が何重にも発揮され、指示・代用等の文法的結束性も加わって、たとえ何か見逃しても、分かりにくい表現があっても、他の結束性で十分カバーされ、必要な意味の構造が理解できるように用意されているのである。

本発表では、「問題」という語を中心に取り上げたが、夥しい語彙のうちの何が談話構成語として働くのか、まだまだわからない点が多い。高頻度で使用され、ある程度一般的な意味をもつ、あるいはあるテクストの中では、相対的に上位語で、一般的な意味をもつもの、ということはいえるかもしれない。今回の「問題」「点」「動き」「アプローチ」の他に「面」「角度」「情勢」のような談話構成語になりそうな語について、実際のテクストの中の使用形態と照合することも引き続き必要である。

談話構成語にともなう、主としてコ系の指示語は、代用というよりも、談話構成語が分節をつくることを助ける談話構成補助機能があることも確認した。一方、ド系の不定指示語は、「～か」をともなうことで、テクストの後方へと向かって牽引力を発揮し、かなり強力な談話構成補助となりうることもわかった。指示語のすべてではないが、コ系（こう、こうして、この、こんな・・）やド系（どう、どうして、どの、どんな・・）が、談話構成語と組み合わさることで、より確実に談話構成の機能が実現できるのではないか、と思われる。

今回使用した、全体テクストとしての一冊の本まるごとのコーパスは、「はしがき」「あとがき」や見出し、目次、図・表、注、演習問題、索引等まで含めて観察でき、しかもきわめて大量のデータが、加工次第で一気にとれるので、テクスト分析にとっての興味深い現象が種々観察できる。コーパス言語学は、テクスト分析にとっても、今後の可能性を豊かに孕んでいる。

## 文献

M．A．K．ハリディ／R．ハッサン（1997）『テクストはどのように構成されるか』安藤貞雄他訳　ひつじ書房

M．A．K．ハリディ／R．ハッサン（1991）『機能文法のすすめ』筧寿雄訳　大修館書店

マッカーシー、マイケル（1995）『語学教師のための談話分析』安藤貞雄・加藤克美訳　大修館書店

＊辞典類　『日本国語大辞典』第 2 版　小学館